

題目：自他間の情動共有過程の検討：生理反応の同期化に着目して

氏名：大家慧

指導教官：亀田達也

私たちは他者の感情を理解し、それに基づいて他者の行動を予測し、その予測に合わせて適切に振舞うことで他者との関係を良好にしたり、逆にわざと険悪にしたりすることもできる。しかし私たちはなぜ他者の感情を理解することができるのだろうか？本研究では他者の感情を理解するプロセスの第一段階ともいえる二者間での情動の共有過程に焦点を当て実験および分析を行った。

Langford らの研究はマウスを用いた実験において、マウスが相手の痛み表出を観察することで、互いに影響を与え合うという痛みの情動共有が行われることを実証的に示すものであった。また他個体の情動表出の影響を受けるという現象は人間を使った Craig の実験でも確認されている (Craig, 1971)。本研究では Langford らの 2 個体のマウスのダイナミックな情動共有過程を示した研究に着目しヒトにおいても同様に情動共有がなされるかを検討するため、二人の人間が対面して座り、互いに観察可能な状況で同時に痛み刺激を繰り返し受けるという実験を行った。この実験により得られた主な結果は 3 つである。一つ目はペア内での痛み情動反応の同期化というヒトの情動共有過程を自然かつ直接的な相互作用のある場面で捉えることができたということである。これらの結果は本研究の主たる目的であったと同時に、今まで行われてきたヒトの情動共有過程に関する研究の中でも類を見ないものとなっている。二つ目は生理レベルの痛み反応が、他者がいるペア条件の方が小さく、個人条件の方が大きかったということである。この傾向は女性のみで観察された。この結果は Langford ら(2006)の結果とは逆のパターンを示しており、ヒトの場合はマウスとは異なり、他者が同時に痛みを与えられる場面でより痛みを感じにくくなるということが示唆された。三つ目は心理尺度の得点と生理的反応の関連性を示すもので、痛み情動反応の同期率と多次元共感性尺度 (MES) の下位尺度である「自己指向性」間に負の相関がみられたことである。このことから他者の心理状態に対して自己に焦点付けられた情緒反応を示す傾向 (鈴木・木野 2008) が低いほどペア間で痛み情動が共有されやすいということがわかった。今後の課題は情動の共有がいかなるシグナルによってもたらされたのかを突きとめることである。